

神戸女学院学生・生徒の宗教的態度と 宗教的準拠集団について

溝 口 靖 夫
西 山 美 瑳 子
茂 洋

目 的

本報告は、神戸女学院学生・生徒の宗教的態度とそれに関連する宗教的準拠集団の性格や種類について考察を行なおうとするものである。

本報告は、溝口靖夫・茂洋「神戸女学院学生および生徒の宗教的態度と行為に関する調査」（神戸女学院大学論集第12巻第2・3合併号、昭和40年12月）の続篇である。前篇では、主として宗教的情操尺度や宗教的行為インベントリー調査の分析に焦点が向けられたが、今回は、それらの結果を主要な分析資料として用いつつ、同時に他方において、学生・生徒のキリスト教化について影響を及ぼす準拠集団の種類、その規範の志向性、学年別変化等を求めようとするものである。この宗教的態度、宗教的行為、およびそれに関連した準拠集団の研究は、その目的が、神戸女学院学生・生徒のこの領域における実態とそこに働く諸要因の相互関連を明らかにすることを企図したものであるが、その方法においては、安藤延男の宗教意識についての一連の研究（1，2，3，4）の追試研究であり、安藤延男によって標準化された宗教的態度および宗教的行為のインベントリー調査の質問項目を使用し、準拠集団（リファレンス・グループ）についての質問は、形式においてその大部分を踏襲しており、部分的変更を行ったにすぎない。したがって、調査結果の分析において、安藤が行った調査結果との比較を行うことができた。ただし、本学院の調査は、学年別にみて、中学部1年から大学4年にわたっているので、同一校における学年別比較

が可能になったことが一つの特色であり、つぎに、キリスト教についての被調査者自身（学生・生徒自身）の規範の志向性を求めたこと、および準拠集団の検出に際して、準拠集団を、キリスト教化について何らかの影響を及ぼすものとして、質問の当初に特定の影響範囲を限定して準拠集団を求めたところが、安藤の調査と異なるところである。

なお、本研究の資料の整理、分析には、本学文学部社会学科第83回卒業生、榎村久、禰屋順子両氏の尽力によるところが大きいことを記しておきたい。

ところでここで準拠集団の概念について少しく触れておきたい。準拠集団は **reference group** の訳語であるが、リファレンス・グループはまた関係集団、照準集団とも訳されている。

人々が行動したり、こうでありたいと考えたり、自己評価を行なうばあい、その行動の基準や動機づけにおいて、または比較の対象として志向されているものは、ある集団の規範、すなわち特定の集団の価値体系や行動基準であり、ときには特定者であったりする。人々は、日常の生活において、同時に様々の多数の集団に所属しながらも、これらの集団が規範において同じものであるとは限らないので、その判断や態度のよりどころとしている集団は、その中のどれか一つの集団であったり、又は場合に応じて、その時々特定の集団の規範に準拠したりしている。そうして又、時には、自己が所属していない集団の規範を志向していることもある。

M. Sherif と C. W. Sherif はリファレンス・グループを次のように定義している。「リファレンス・グループは、個人が、所属することを認めており、あるいはまた、所属することを望んでいる集団である」（9, pp. 54—55）。この Sherif の定義の前提となっているものは、特定個人が特定集団の成員か非成員かということよりも、その個人が、心理的に、判断や行動の準拠の枠組を何処にしているかということである。Sherif は更に次のように定義している。「リファレンス・グループとは、個人が、心理的に、自己を集団の一部として関係づけたり、あるいは関係づけようとする集団のことである」（8, p. 175）。要するに Sherif は、リファレンス・グループを、所属集団、非所属集

団たるとを問わず、個人が心理的に投錨する集団とみなしている。

このSherif の定義に対して根本的には同系列に属するものに、T. M. Newcomb のリファレンス・グループについての見解がある。Newcomb は、リファレンス・グループを主として規範から捉えている。所属集団とは、一個人が他人によりその所属が認められている集団のことである。個人は、所属集団の規範を、他人から所属していると認められているが故に、そうしてその規範を行使することによって動機を満足させるが故に、共有するのである。しかしながら、人は、時には、成員として認められていない集団の規範をも行使している。そこでここに所属集団とリファレンス・グループとを区別することが便利である。もしも一個人の態度が、他の人々と共有する（と考えられる）規範によって影響されるとしたならば、これらの他の人々は彼にとってリファレンス・グループとなる。この意味からすれば、リファレンス・グループは、実際にそういう集団があるかどうかは問題でなく、ある人にとっては、未知の人であったり、故人であったり、架空の集団であったりすることもある。リファレンス・グループにおいて重要なことは、その規範が、実際に、個人の態度や行動に影響をおよぼす準拠の枠組を与えているということである。全所属集団は、恐らく、その成員にとって、その程度や方向に差はあるにしても、リファレンス・グループとして働いているであろうが、全リファレンス・グループが所属集団ではないのである。一個人にとって、その所属集団がどの程度リファレンス・グループとなりうるかは、その集団への所属が彼に満足、不満足をもたらし程度による。特定集団の成員達は、技能、能力、個人的欲求、人格形成において様々であり、したがって彼らはその集団の成員であることに様々な程度の満足や不満を感じている。一般的にいて、一個人が、成員として、それが具体的であると象徴的であるとを問わず、受け入れられ、あるいは動機づけられている集団が積極的な（positive）リファレンス・グループである。これに対して、反対するように動機づけられ、あるいは成員として取り扱われることを欲しない集団が消極的な（negative）リファレンス・グループである。積極的なリファレンス・グループと消極的なリファレンス・グループとが、時

には同一集団であることもありうる。例えば家族は青少年にとり積極的リファレンス・グループであるが、しかし何か特定の事柄について反対の態度が表明されるとき、その事に関しては消極的リファレンス・グループとなる。なお、附言すればリファレンス・グループに積極的リファレンス・グループと消極的リファレンス・グループの二種類があることにより、人々の態度は二重に強められる。すなわち特定集団への忠誠と、それに相反する規範を持つ集団との対立によって特定の規範への志向性が一層強められるのである（7, pp. 225—227）。

Sherif も Newcomb も、共に、リファレンス・グループを、個人が価値的に志向する集団乃至は個人として、規範機能の面から捉えている点で共通性を持っているが、これに対して、R. K. Merton は、リファレンス・グループを比較機能の面から捉えている。個人が自己および他人を評価する際の相対的比較の枠組を与え、社会的地位の相対的比較の準拠点となるものがリファレンス・グループである。Merton は、第二次大戦中の内地・外地のアメリカ兵士に対して行った徴兵、および軍隊の階級昇進についての態度調査の分析において、これらの項目についての兵士の満足感、不満足感は、相対的欠如感（*relative deprivation*）に基くことを見出している。満足、不満足は他と比較するところから生じるのであり相対的なものである。（5, pp. 227—236）。

本報告においては、このようなリファレンス・グループの概念を採用することにより分析を試みた。学生・生徒が自己の価値志向や行動の基準を求める準拠の枠組となっている準拠集団は、数において多数であり、その種類も多様であろう。この調査では、学生・生徒の宗教的問題に影響をおよぼす準拠集団を求めてみた。学生・生徒は、その所属集団として、家族、親戚、学校、級友、親友等の集団をもっているが、それらの集団の規範を個々にみていけば、その志向性において同一方向をもっているものもあれば相反するものもあるであろう。一学生・生徒が所属する複数の集団の規範、および準拠集団の規範が何れも同一方向の志向性を持つばあいには、そこには規範の一致性があるから、その方向への志向性は一層強められるであろう。しかし、所属し、準拠する集団

の規範が相互に衝突し、葛藤があるばあいには、準拠集団は、特定の規範に対して **positive** な働きをする準拠集団と **negative** な働きをする準拠集団とに分かれてくる。本研究ではこの意味において、準拠集団を、キリスト教化に対して **positive** なもの、中立的なもの、**negative** なものとの3種類に分けて考察した。なお **positive** な準拠集団をもつものと、**negative** な準拠集団をもつものとは、自己のキリスト教化についての志向性の評定において比較の準拠点に相違があると考えられるので、この点をもあわせて考察するつもりである。

方 法

本学院中高部生徒および大学生全員が調査対象者となり、昭和40年7月上旬に実施された。

調査には質問紙を用い、対象者に自分で記入してもらった。この調査票は、前述した如く安藤延男によって標準化されたものである。本調査票は、宗教的情操尺度、宗教的行為インベントリー、および宗教的態度形成に関連をもつ準拠集団についての第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲの質問形式から成立している。第Ⅰ型式、宗教的情操尺度の質問は32問から成り、これらの質問は、4個の下位尺度、すなわち「神の愛への絶対的信頼」、「神の義と審きに対する畏れの感情」、「神への絶対依属感情」、および「信仰による平安」を測定する尺度となり、これら4個の下位尺度得点は合計されて尺度総合点となる。第Ⅱ型式、宗教的行為インベントリーの質問は22問から成り、これらの質問は、「基督教と関係のある日常生活、もしくは、それに影響する行為の諸側面に関するもの」(4, 62頁)である。第Ⅲ型式、宗教的態度形成に関連をもつ準拠集団についての質問は、個人のキリスト教的な態度形成に対して、いかなる人々やグループが影響をもっているか、いいかえれば個人にとって関係が深い父、母、親友、学校当局、教師等の人々やグループが、基督教に対してとる態度を対象者に知覚させ、それらを対象者の宗教的態度との関連を求めようとするものである。

第Ⅰ、第Ⅱ型式の質問およびその尺度化の方法については、前掲論文（６）中に引用したところであるので、ここでは、第Ⅲ型式の質問、および準拠集団の検出方法についてふれることにする。

第Ⅲ型式の質問は、第１問と第２問とに分かれている。第１問は、所属集団や非所属集団の、キリスト教化についての、個々人に知覚された規範尺度を求めようとするものである。特定の集団の規範が、キリスト教化について、賛成か、中立か、反対かを、対象者が個々に推定し、対象者の知覚したところを記入してもらった。したがってここでは集団ないし個人の規範というばあい、客観的な何らかの基準によって類別された規範を意味するものでなく、それは、専ら、対象者が知覚し認知した規範に基いている。第２問は、準拠集団尺度であり、先に、集団規範尺度で取扱われた諸集団のうち、自分自身にとって、もっとも関係深いものから４個の集団を選び、一対比較のための対（pair）をつくる。したがって計６個の対ができることになる。１個の比較における被選択を１点とすると、１つの集団の最大可能得点は３、最少可能得点は０となる。×印は０.５点となる。これらの比較で３点を得た集団をその個人の第１準拠集団とし、以下、第２、第３準拠集団とした（１， 85頁）。

準拠集団の分析に使った標本数は次の通りである。なお、後出第1図の宗教的態度値の学年平均は、全数調査における全回収票の平均を出したものである。

第１表 準拠集団分析の際の標本数

	在 籍 数	標 本 数	在籍数に対する抽出比
中 学	427	185	1/2.3
高 校	484	201	1/2.4
大 学	1,115	358	1/3.1
全学院合計	2,026	744	1/2.7

第2表 第Ⅲ型式質問

宗教的態度に関連した質問

1. 次のような意見があります。

意見 「この学院の生徒は、洗礼を受けて、キリスト教の信者になることが望ましい」

この意見について、他の人や、他のグループの人々はどのように考えていますか。まず自分の考えていることを答え、つづいて他の人々が考えていると思われることを答えて下さい。

答は、回答欄に次のa、b、c、m、x、y、zの記号で記入して下さい。

a	b	c	m	x	y	z	e
その意見にひじょうに賛成	かなり賛成	まあまあ賛成	賛成でもないが、反対でもない	やや反対	かなり反対	その意見にひじょうに反対	わからない

自分	学校	父	母	父母以外の家族	親戚	親友	学級又は同学年の人	先生	大部分の上級生	大部分の下級生	世間の人

2. この質問は、宗教的問題について、あなたにとって、いちばん関係のふかいのはどのような人々か、どういうグループかをみつけるためのものです。

質問に答えるまえに、次の集団（または人々）のなかから、いちばん関係の深いと思われる人々かグループかの4つをえらんでイ、ロ、ハ、ニの（ ）の中に記入して下さい。

学校、父、母、父母以外の家族、親戚、親友、学級、先生、教会、世間の人、その他（具体的に）

イ（ ） ロ（ ） ハ（ ） ニ（ ）

質問 あなたは、キリスト教の信者に、(自分が)なるか、ならないかという問題では、
上記4グループの中、次の2つのグループのどちらの考えに強く従いますか。従う
方に○をつけて下さい。もしいくら考えてもきまらないときは、——の上に×印を
つけて下さい。

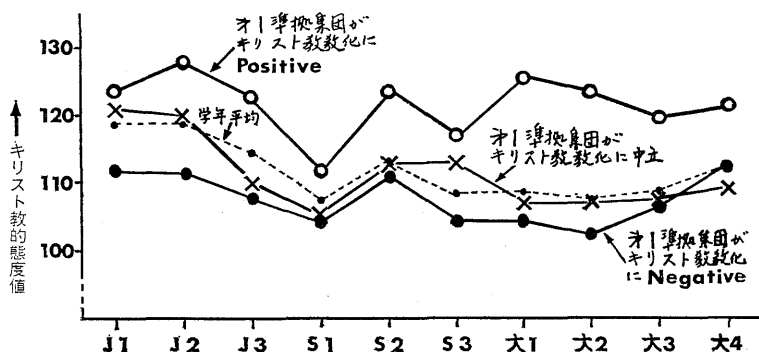
イ—— ——— ロ イ—— ——— ニ ロ—— ——— ニ
イ—— ——— ハ ロ—— ——— ハ ハ—— ——— ニ

結果と考察

第1準拠集団の志向性と学生・生徒の宗教的態度 学生・生徒の宗教的態度は、彼女らの第1準拠集団の規範の志向性如何によって影響されるところが大きいであろう。この仮説を確かめるために、第1準拠集団の規範の志向性如何を、すなわち、キリスト教化に **positive** か、中立か、**negative** かを、学生・生徒の知覚的判断により識別したところに基いて類別し、第1準拠集団の志向性別に学生・生徒の宗教的態度値を求めてみた。その結果は第1図および第3、4表に示すとおりである。中学部1年から大学4年に至る全学年において、第1準拠集団がキリスト教化に **positive** なものは、それが、中立ないしは **negative** なものに比べて態度値の平均が高く、殊に **positive** なものと **negative** なものとを比較するとき、両者のスコアには有意的差がみられる。そうして全般的にみて、第1準拠集団が **negative** なものは、この三者の中で最も態度値が低く、中立はそれらの中間的態度値を示している。なお、学年別平均と比較するとき、学年平均の変化は、J1から次第にゆるやかに下降し始め、S1で最初の谷底となり、次いでS3が第二の谷の一部を形成することになるが、同様なことが、**positive** なグループにおいてもみられる。勿論、第1準拠集団が **positive** なグループの態度値は、学年平均を大きく上廻っているが、S1とS3でそれぞれ谷を形作っている。何故、S1とS3でそうなるか、その要因をつきとめる直接の資料は、この調査では扱っていないので推測の域を出ないが、年令的に自意識への自覚が強くなり、また多様な価値体系を摂取、選択する時期にさしかかり、更に、後出するごとく、多種な準拠集団の中で、親友の

第1図 第1準拠集団のキリスト教教化についての

志向性別にみた学年別態度値の変化



占める比率が中学部時代より大きくなり、しかもこの親友集団の規範の志向性もまた一定でないこと等に影響を受けていると考えられる。

次に、第1準拠集団の志向性別にみた学年別態度値の変化と学校別比較を行ってみた。第2図に示したF女学院は本学院と同様なキリスト教主義の学校である。中学部の態度値の状況をみると、本学院に比べて、第2学年で著しい下降がみられ、次いで3学年でやや上昇している。宗教的態度値についての、この両校の学年別変化のパターンの相違はかなり対照的であるように見受けられる。(F女学院の態度値は、文献、1、87頁の表より換算)

第3図は、第1準拠集団の価値志向と標準偏差との相関関係をみたものである。学年別に、第1準拠集団の志向性に類別したグループの宗教的態度の平均値と標準偏差値(態度値のばらつき)を求め、その相関をみると、第3図に示すように第1準拠集団が、キリスト教教化に **positive** なグループは、態度値のスコアが高くなるにつれて標準偏差値は小さくなって行く傾向がみられる($r=-0.950$)。このことは、**positive** なグループの規範が、高スコアのほうへ、すなわち、より以上に宗教的態度のほうへ同調しようとする志向性があることを意味するものである。なお、**negative** なグループには宗教的対度値

第3表 (J.S.)

知覚された第1準拠集団のキリスト教化の規範と、
キリスト教的態度値及びキリスト教的行為値

第I型式

学年	知覚された 規範	キリスト教化に Positive (A)	中立 (B)	キリスト教化に Negative (C)	統計的検定	
					比較	t P<.01** P<.05* P<.10+
J. 1	N	31	16	14	(A)~(C)	2.46 *
	Mn	123.39	120.69	111.43	(B)~(C)	1.59 P<.20
	SD	14.46	13.23	15.36		
J. 2	N	23	12	25	(A)~(C)	3.57 * *
	Mn	127.87	119.67	111.12	(A)~(B)	1.55 P<.20
	SD	16.22	14.49	16.19	(B)~(C)	1.61 P<.20
J. 3	N	32	20	12	(A)~(C)	2.55 *
	Mn	122.28	109.60	107.42	(A)~(B)	2.82 * *
	SD	19.54	12.88	16.25	(B)~(C)	2.30 *
S. 1	N	25	15	19	(A)~(C)	2.096 *
	Mn	114.48	105.20	104.42	(A)~(B)	1.97 +
	SD	17.18	12.33	14.46		
S. 2	N	31	17	14	(A)~(C)	1.81 +
	Mn	123.65	113.24	110.71	(A)~(B)	2.03 *
	SD	15.17	17.89	24.80		
S. 3	N	31	27	22	(A)~(C)	2.46 *
	Mn	116.97	112.96	104.05	(A)~(B)	0.844 P<.50
	SD	20.30	15.94	17.86	(B)~(C)	1.83 +

第 II 型 式

学年	知覚された 規範	キリスト教化に Positive (A)	中 立 (B)	キリスト教化に Negative (C)	統 計 的 検 定	
					比 較	t P<.05* <.10+
J . 1	N	31	16	14	(A)~(C)	2.609 *
	Mn	55.32	54.31	50.57	(B)~(C)	2.273 *
	S D	6.93	4.55	4.94		
J . 2	N	23	12	25	(A)~(C)	1.61 P<.20
	Mn	55.57	51.42	52.12	(A)~(B)	2.00 +
	S D	7.54	4.73	7.25		
J . 3	N	32	20	12	(A)~(C)	2.90 * *
	Mn	56.19	49.15	49.42	(A)~(B)	4.76 * *
	S D	5.18	5.18	7.41		
S . 1	N	25	15	19	(A)~(C)	3.62 * *
	Mn	56.96	49.87	49.74	(A)~(B)	3.14 * *
	S D	8.21	6.05	4.88		
S . 2	N	31	17	14	(A)~(C)	3.10 * *
	Mn	55.23	50.05	48.25	(A)~(B)	2.16 *
	S D	8.79	7.42	5.98	(B)~(C)	0.75 P<.50
S . 3	N	31	27	22	(A)~(C)	1.89 +
	Mn	53.32	50.52	48.68	(A)~(B)	1.17 P<.30
	S D	10.25	7.93	7.56	(B)~(C)	0.83 P<.50

第 4 表 (大学) 第 1 準拠集団の規範と
キリスト教的態度値

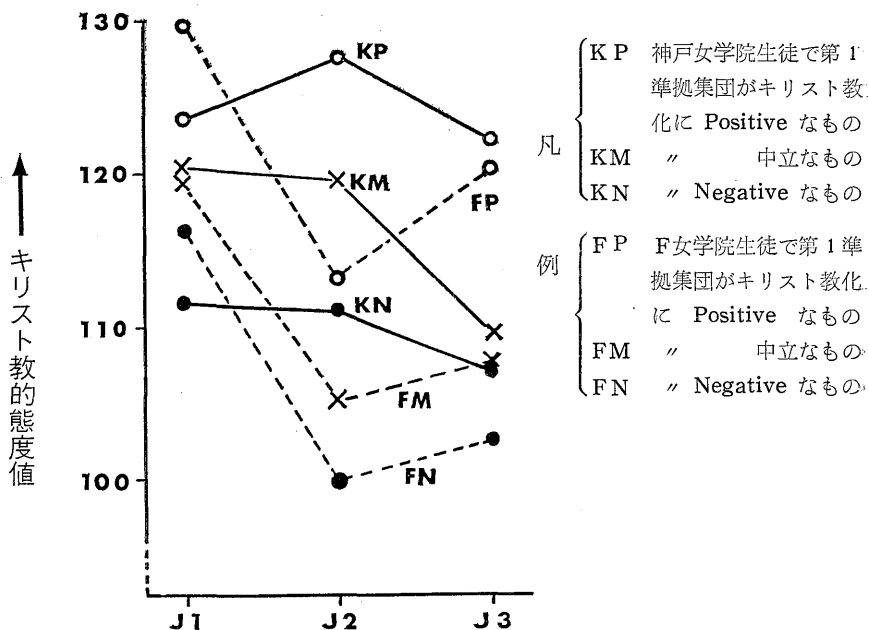
第 I 型式

学年	知覚された 規範	Positive (A)	中 立 (B)	Negative (C)	統計的検定	
					比 較	t P $<0.01^{**}$ $<0.05^{*}$
大 1	N	30	24	32	(A)~(C)	4.8 **
	Mn	125.20	107.08	104.06	(A)~(B)	3.87 **
	SD	17.46	16.75	17.22	(B)~(C)	0.65 0.6<P<0.5
大 2	N	37	17	30	(A)~(C)	5.2 **
	Mn	123.24	107.18	102.07	(A)~(B)	4.8 **
	SD	18.29	15.81	15.27	(B)~(C)	4.7 **
大 3	N	37	30	24	(A)~(C)	2.22 *
	Mn	118.86	106.90	107.00	(A)~(B)	3.2 **
	SD	19.54	19.19	20.92	(B)~(C)	0.02 P<0.9
大 4	N	46	32	19	(A)~(C)	2.21 *
	Mn	121.02	109.28	111.74	(A)~(B)	2.8 **
	SD	19.39	17.15	13.61	(B)~(C)	0.6 0.6<P<0.5

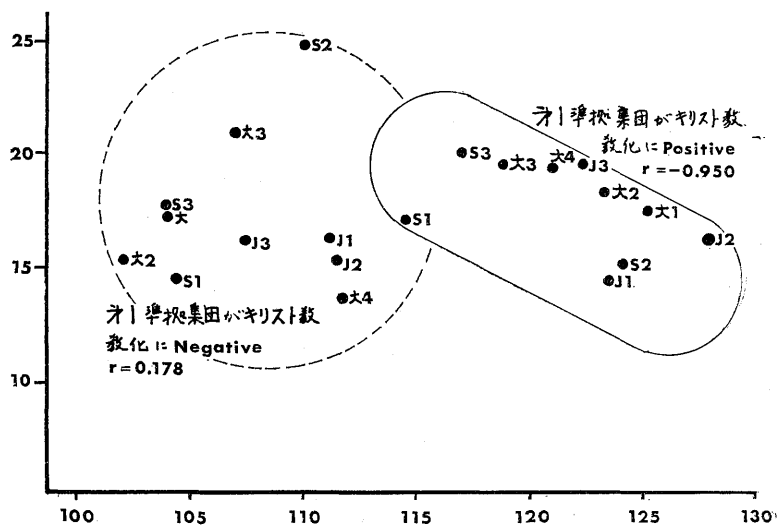
第 II 型 式

学年	知覚された 規範	Positive	中 立	Negative	統 計 的 検 定	
		(A)	(B)	(C)	比 較	t P <0.01** <0.05*
大 1	N	30	24	32	(A)~(C)	4.41 **
	Mn	55.43	48.42	46.59	(A)~(B)	3.19 **
	S D	9.09	7.16	6.30	(B)~(C)	1.23 P<0.1
大 2	N	37	17	30	(A)~(C)	4.65 **
	Mn	56.00	48.37	46.50	(A)~(B)	3.45 **
	S D	11.36	5.80	6.44	(B)~(C)	1.83 P<0.1
大 3	N	37	30	24	(A)~(C)	3.05 **
	Mn	53.03	47.87	46.63	(A)~(B)	1.71 P<0.1
	S D	9.29	5.85	6.69	(B)~(C)	1.55 P<0.2
大 4	N	46	32	19	(A)~(C)	3.14 **
	Mn	54.28	50.00	47.47	(A)~(B)	2.18 *
	S D	9.63	7.61	7.19	(B)~(C)	1.19 P<0.3

第2図 第1準拠集団のキリスト教化についての
志向性別にみた学年別態度値の変化と学校別比較（中学）



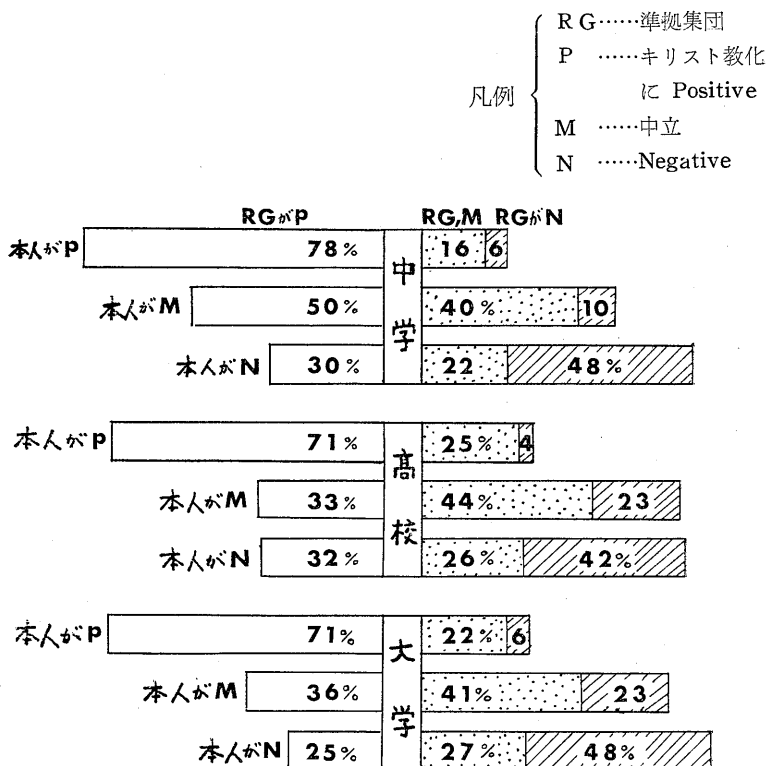
第3図 第1準拠集団の価値志向と標準偏差



の高低と標準偏差との相関はみられなかった ($r=0.178$)。

学生・生徒自身の規範の志向性と準拠集団の規範の志向性 学生・生徒自身について宗教意識、殊にキリスト教化についての志向性は、第1準拠集団のキリスト教化についての志向性に大きく影響されるであろうと考えられる。そこでこの点を見るために、学生・生徒を、本人自身のキリスト教化についての態度別に、**positive**、中立、**negative** の三グループに分ち、これら各グループの第1準拠集団の志向性を求めたのが第4図である。本人が **positive** なグル

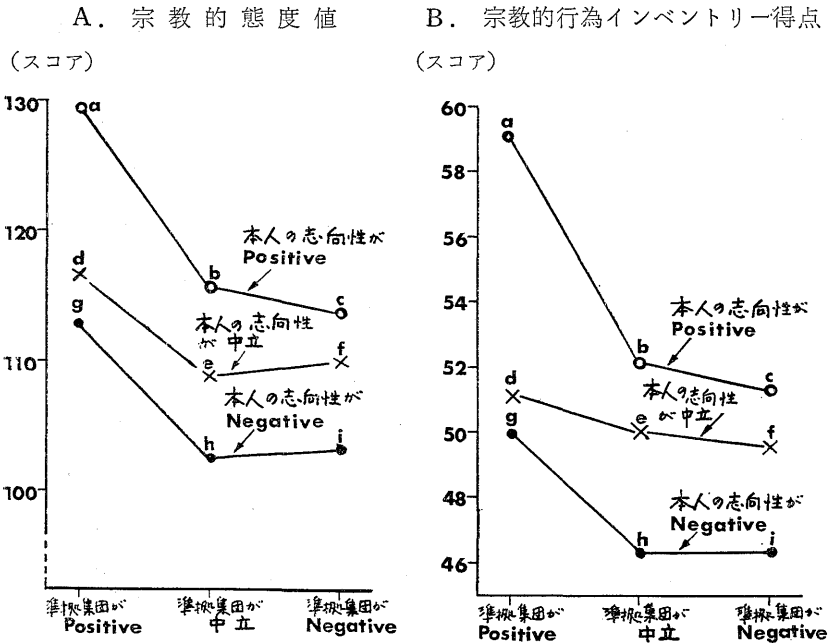
第4図 キリスト教化についての自己の規範の志向性と
第1準拠集団の志向性



ープでは、第1準拠集団の志向性も **positive** なものの比率がきわだって高い。本人が中立であるグループでは第1準拠集団も中立の比率が最も大きく、本人が **negative** なグループでは、第1準拠集団の中で **negative** なものの比率が最も大きくなっている。これらのことから、本人の志向性は、第1準拠集団の志向性によって影響されるところが大きいのではないかと推測される。そうして、その影響は同方向に強く働いているとみることができる。

本人の志向性が、第1準拠集団の志向性と同方向に強く影響されるとすれば、次のような仮説がなり立つ。すなわち、第1準拠集団が **positive** であれば、これらのグループに属する学生自身の態度志向が中立、ないしは **negative** であっても、**positive** な準拠集団の影響下にあるために、準拠集団が中立や **negative** のグループに比べて、宗教的行為や意識についての比較の基準、すなわち準拠点が高くなり、従って本人が考えている以上に、第三者からみれば、その意識や行為においてよりキリスト教的なのではあるまいか。この点をみたのが第5図である。第5図では、Aにおいて宗教的態度値を、Bにおいて宗教的行為インベントリー得点を求めた。A図におけるb点、c点は、それぞれ第1準拠集団が中立、および **negative** なグループの中での、本人の志向性が **positive** な人達の平均値である。これに対して、d点およびg点は、準拠集団が **positive** なグループの中での本人の志向性が中立ないし **negative** な人達の平均値である。そこで、b, c点と d, g点とを比較すると、この四者に有意差はないのであって、殊にc点は本人の志向性が **positive** であるにも拘らず、第1準拠集団が **negative** である為に、比較の準拠点が低いと推測できるのであり、したがって相対的に低い宗教的態度値のところに位置しておりながら自己自身の志向性を **positive** としている。これに対しd, g点はもともと比較の準拠点が高いので、したがって宗教的態度値は相対的に高いところにあっても自己に対して厳しくなっているとも考えられる。宗教的行為を取り上げたB図においても同様な傾向がうかがえる。

第5図 キリスト教教化についての自己の規範の志向性と
第1準拠集団の志向性別にみた宗教的態度値と
宗教的行為インベントリー得点 (大学)



第1、第2、第3準拠集団の規範と学生、生徒の宗教的態度値 複数の準拠集団の規範が相互に支持しあう場合、その規範の方向に、個人の態度の強化がみられるであろう。この仮説については、既に安藤がF女学院で試みた調査結果により、一応支持されたといえるが(1, 89頁)、本学院ではどうであろうか。

本学院の調査結果に基づき、第1準拠集団の規範と第2準拠集団の規範との相互関係と、宗教的態度値および宗教的行為値をみたのが第5表である。

まず第5表の1, 2で第1準拠集団の規範がキリスト教化に **positive** な場合で、第2準拠集団の規範も **positive** な、規範が相互に支持する場合をみると、第2準拠集団の規範が中立ないしは **negative** な場合に比較して、全般的

第5表 第1準拠集団の規範と第2準拠集団の規範との相互関係と、
宗教的態度値および宗教的行為値

第5表の1 第1準拠集団の規範がキリスト教化に

Positive な場合 (中高部)

第I型式

規範の相互関係		(A)互に支持	(B)中立	(C)互に矛盾	統計的検定	
					比較	<.01**
第1R.G.の規範	Positive	Positive	Positive			P<.05*
第2R.G.の規範	Positive	中立	Negative			t <.10+
J 1	N	24	5	2	(A)~(C)	1.55 P<.20
	Mn	125.08	112.20	131.00	(A)~(B)	1.35 P<.20
	SD	13.67	20.30	8.00	(B)~(C)	1.75 P<.20
J 2	N	16	2	5		
	Mn	127.75	124.50	129.60		
	SD	13.89	20.50	20.58		
J 3	N	24	3	5	(A)~(C)	1.43 P<.30
	Mn	123.92	121.00	115.20	(B)~(C)	1.36 P<.20
	SD	21.79	1.41	9.35		
S 1	N	19	4	2	(A)~(C)	2.74 *
	Mn	115.84	113.00	104.50	(B)~(C)	0.79 P<.50
	SD	16.19	21.17	2.50		
S 2	N	15	13	3	(A)~(C)	2.46 *
	Mn	128.47	120.00	115.33	(A)~(B)	1.42 P<.20
	SD	15.84	15.65	6.02	(B)~(C)	0.84 P<.50
S 3	N	18	7	6	(A)~(B)	2.38 *
	Mn	120.78	103.00	118.50	(B)~(C)	1.77 P<.20
	SD	20.83	15.65	15.87		

第Ⅱ型式

規範の相互関係		(A)互に支持	(B)中立	(C)互に矛盾	統計的検定	
					比較	$<.01^{**}$
第1R.G.の規範	Positive	Positive	Positive			$P<.05^*$
第2R.G.の規範	Positive	中立	Negative			$t <.10^+$
J 1	N	24	5	2		
	Mn	55.29	55.60	55.00		
	SD	7.47	4.45	5.00		
J 2	N	16	2	5		
	Mn	55.75	55.50	55.00		
	SD	6.24	12.50	7.56		
J 3	N	24	3	5	(A)~(C)	4.24 * *
	Mn	58.33	51.00	49.00	(A)~(B)	2.12 *
	SD	8.81	5.10	2.83		
S 1	N	19	4	2		
	Mn	57.58	54.75	55.50		
	SD	8.19	8.28	5.50		
S 2	N	15	13	3	(A)~(C)	1.38 $P<.20$
	Mn	57.40	54.15	49.00	(A)~(B)	1.11 $P<.30$
	SD	8.18	7.35	9.90	(B)~(C)	1.01 $P<.40$
S 3	N	18	7	6	(A)~(B)	2.35 *
	Mn	55.11	46.43	56.00	(B)~(C)	2.34 *
	SD	10.49	7.29	7.42		

第5表の2 第1準拠集団の規範がキリスト教化に

Positive な場合 (大学)

第Ⅰ型式

第Ⅱ型式

規範の相互関係		(A)互に支持	(B)中立	(C)互に矛盾	(A)互に支持	(B)中立	(C)互に矛盾
第1 R.G.の規範		Positive	Positive	Positive	Positive	Positive	Positive
第2 R.G.の規範		Positive	中立	Negative	Positive	中立	Negative
大1	N	23	4	2	23	4	2
	Mn	127.43	124.25	106.0	56.13	54.50	47.60
大2	N	17	10	10	17	10	10
	Mn	120.24	130.20	121.30	57.00	56.30	55.40
大3	N	24	7	4	24	7	4
	Mn	122.29	118.86	111.25	55.42	53.14	50.25
大4	N	26	12	7	26	12	7
	Mn	128.69	114.08	106.0	58.39	48.75	50.00
全体	N	90	33	23	90	33	23
	Mn	125.78	121.21	113.57	56.74	53.17	50.66

大1 (A) ~ (C) $t=2.9$ $P<0.01$

第 5 表の 3 第 1 準拠集団の規範がキリスト教化に

Negative な場合 (中上部)

第 I 型 式

規範の相互関係		(A)互に支持	(B) 中 立	(C)互に矛盾	統 計 的 検 定	
第1R.G.の規範		Negative	Negative	Negative	比 較	P
第2R.G.の規範		Negative	中 立	Positive		t
J 1	N	10	—	4	(A)~(C)	0.93 P<.40
	Mn	113.40	—	106.50		
	SD	16.52	—	10.44		
J 2	N	19	1	5	(A)~(C)	1.02 P<.40
	Mn	107.05	125	125.80		
	SD	12.57		18.22		
J 3	N	6	1	5		
	Mn	108.83	89	109.40		
	SD	13.26		18.68		
S 1	N	9	3	7		
	Mn	105.22	104.00	104.14		
	SD	17.15	1.41	13.64		
S 2	N	6	5	3	(A)~(B)	1.68 P<.20
	Mn	116.67	97.20	121.33	(B)~(C)	1.75 P<.20
	SD	18.00	19.87	18.35		
S 3	N	10	6	6	(A)~(C)	1.31 P<.30
	Mn	100.20	103.00	111.50	(B)~(C)	0.96 P<.40
	SD	19.21	15.46	15.27		

第 II 型 式

規範の相互関係		(A)互に支持	(B) 中 立	(C)互に矛盾	統 計 的 検 定	
第1R.G.の規範		Negative	Negative	Negative	比 較	P
第2R.G.の規範		Negative	中 立	Positive		t
J 1	N	10	—	4	(A)~(C)	0.64 P<.60
	Mn	51.10	—	49.25		
	SD	4.89	—	4.81		
J 2	N	19	1	5	(A)~(C)	1.53 P<.20
	Mn	51.26	46	56.60		
	SD	6.93		7.06		
J 3	N	6	1	5	(A)~(C)	0.81 P<.50
	Mn	47.67	50	51.40		
	SD	7.39		7.66		
S 1	N	9	3	7		
	Mn	49.00	51.00	50.14		
	SD	6.03	5.10	2.17		
S 2	N	6	5	3	(A)~(B)	0.90 P<.40
	Mn	49.17	45.80	50.67	(B)~(C)	1.19 P<.30
	SD	5.39	6.70	4.89		
S 3	N	10	6	6	(A)~(C)	1.70 P<.20
	Mn	47.00	47.33	52.83	(C)~(B)	2.03 P<.10
	SD	9.20	4.10	5.49		

第 5 表の 4 第 1 準拠集団の規範がキリスト教化に

Negative な場合 (大学)

第 I 型 式

規範の相互関係		(A)互に支持	(B) 中 立	(C)互に矛盾	統 計 的 検 定	
第1R.G.の規範		Negative	Negative	Negative	比 較	<0.01 **
第1R.G.の規範		Negative	中 立	Positive		t P<0.02 △ <0.05 *
大 1	N	21	—	10	(A)~(C)	0.78 P<.50
	Mn	102.81	—	107.2	(A)~(B)	— —
	S D	18.51	—	13.08	(B)~(C)	— —
大 2	N	14	8	8	(A)~(C)	1.48 P<.20
	Mn	95.21	111.13	105.00	(A)~(B)	3.12 **
	S D	13.81	9.73	16.6	(B)~(C)	0.9 P<.40
大 3	N	16	2	6	(A)~(C)	0.2 P<.90※
	Mn	103.69	88.00	102.00	(A)~(B)	2.43 △ ※
	S D	24.36	3.0	11.18	(B)~(C)	2.78 **
大 4	N	12	2	4	(A)~(C)	4.5 **
	Mn	104.67	122.5	127.75	(A)~(B)	2.07 *
	S D	9.52	11.5	8.67	(B)~(C)	2.50 △
全体	N	63	12	28		
	Mn	101.70	109.17	108.39		
	S D					

※ 仮説とは逆の方向

第 II 型 式

規範の相互関係		(A)互に支持	(B) 中 立	(C)互に矛盾	統 計 的 検 定	
第1R.G.の規範		Negative	Negative	Negative	比 較	<0.01**
第2R.G.の規範		Negative	中 立	Positive		t P<0.05 *
						<0.1 +
大 1	N	21	—	10	(A)~(C)	0.02 P<.90※
	Mn	46.67	—	46.60	(A)~(B)	— —
	SD	5.41	—	8.98	(B)~(C)	— —
大 2	N	14	8	8	(A)~(C)	0.53 P<.60
	Mn	45.00	51.00	46.50	(A)~(B)	2.61 * *
	SD	5.42	5.01	7.0	(B)~(C)	1.50 P<.20
大 3	N	16	2	6	(A)~(C)	2.0 * ※
	Mn	48.31	44.50	43.00	(A)~(B)	1.74 + ※
	SD	6.57	6.5	5.13	(B)~(C)	0.6 P<.60
大 4	N	12	2	4	(A)~(C)	5.4 * *
	Mn	44.92	47.00	59.50	(A)~(B)	0.85 P<.40
	SD	4.28	3.0	4.82	(B)~(C)	3.91 * *
全体	N	63	12	28		
	Mn	46.23	47.5	48.9		
	SD					

※ 仮説とは逆の方向

にみれば、宗教的態度は規範が支持する方向へ一層強められている傾向がうかがえた。しかし、これを個々の学年別にみれば、態度値の開きに有意差のない学年がかなりあり、しかも、規範が相互に矛盾ないし中立するものは、その該当数が少ないので、ここではそのはっきりした傾向を得るまでに至らなかったといえる。

つぎに第5表の3、4で、第1準拠集団の規範がキリスト教化に **negative** で、第2準拠集団も **negative** な場合をみると、**positive** な場合と同様に、一般的にいて、規範を支持する方向へ向う傾向がみられた。しかし、ここでも態度値に有意差はみられないが、仮説とは相反する状況があった。すなわち第5表の3のJ1および第5表の4の大3にみられるごとく、第1、第2準拠集団の規範が共に **negative** な方向に志向しているグループのほうが、第2準拠集団の規範が **positive** なグループよりも、宗教的態度値が高かった。この二つのグループに共通してみられることは、同学年の、規範が相互に中立ないし矛盾するグループに比較して標準偏差値が大きいことである。このことは、このグループの中に、態度において大きな開きがある人々を含んでおり、特に態度値において相対的に高いスコアをもっているものは、自己の規範と第1、第2準拠集団の規範との矛盾に遭遇していると推察される。

第6表は、第1、第2、第3準拠集団の規範の相互関係と宗教的態度値をみたものである。規範の志向性が **positive** であると **negative** であるを問わず、何れも相互に支持する規範の方向へ態度が強められているとみることができる。すなわち第1、第2、第3準拠集団の規範が共にキリスト教化に **positive** であるグループの宗教的態度値、宗教的行為値は、各グループ中最も得点値が高いのであり、逆に第1、第2、第3準拠集団の規範が共に **negative** なグループは各グループ中の最低値を示している。これらのことから、複数の準拠集団の規範の志向性が共に支持する方向にあるばあいには、個人の態度や行為は、その規範の支持する方向へ一層強められるといえる。要するに、「相支持しあう多元的リファレンス・グループをもつ個人の宗教的態度は、その規範の方向に強化される」(1, 92頁) という安藤の結果は、本学院の結果においても同様に認められたのである。

第 6 表 第 1、第 2、第 3 準拠集団の規範の相互関係と
宗教的態度値 (大学)

第 6 表の 1 第 1 準拠集団の規範が **Positive** で、第 2、3 準
拠集団が **Positive** ないしは中立の場合

		A	B	C
第 I R.G. の規範		Positive	Positive	Positive
第 II R.G. の規範		中 立	Positive	Positive
第 III R.G. の規範		中 立	中 立	Positive
N		16	19	55
Mn	第 I 型式	124.19	124.16	128.53
	第 II 型式	54.3	54.9	57.5

第 6 表の 2 第 1 準拠集団の規範が **Negative** で、第 2、
第 3 準拠集団が **Negative** ないしは中立の場合

		A	B	C
第 I R.G. の規範		Negative	Negative	Negative
第 II R.G. の規範		中 立	Negative	Negative
第 III R.G. の規範		中 立	中 立	Negative
N		2	10	28
Mn	第 I 型式	118.50	107.70	97.66
	第 II 型式	49.5	47.5	45.4

第1準拠集団の種類とその規範の志向性 学生・生徒のキリスト教化についての第1準拠集団の種類とその比率についてみれば、第7表に示すとおりである。J 1 から大学4年に至る各学年を通じて、父、母および父母以外の家族

第7表 学年別にみた第1準拠集団の種類の比率

(%)

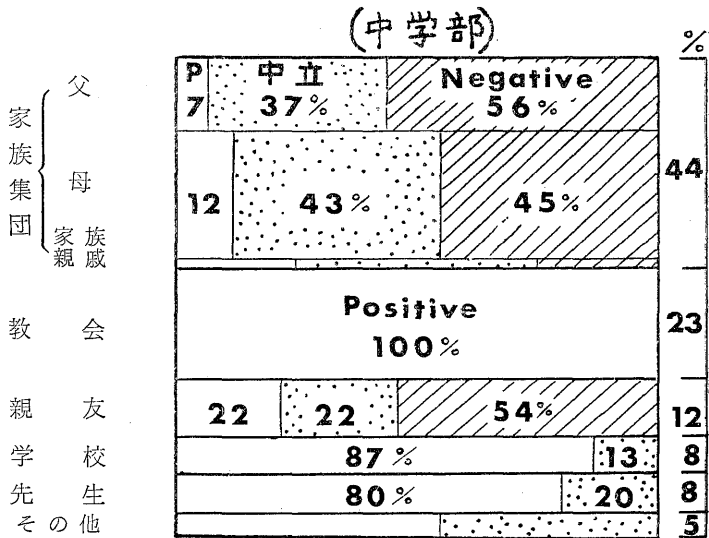
準拠集団 学年	家族集団	親 友	教 会	学校集団	その他	合計	標本数
J 1	46.4	5.4	17.9	30.3	—	100	56
J 2	51.7	10.0	20.0	15.0	3.3	100	60
J 3	37.5	20.3	31.3	6.3	4.6	100	64
S 1	47.4	13.6	32.2	5.1	1.7	100	59
S 2	45.2	24.3	25.8	4.8	—	100	62
S 3	46.2	33.8	17.5	2.5	—	100	80
大 1	60.5	14.0	14.0	10.5	1.0	100	86
大 2	46.4	17.9	25.0	10.7	—	100	84
大 3	50.3	20.9	18.7	7.7	2.2	100	91
大 4	35.1	28.9	14.4	20.6	1.0	100	97

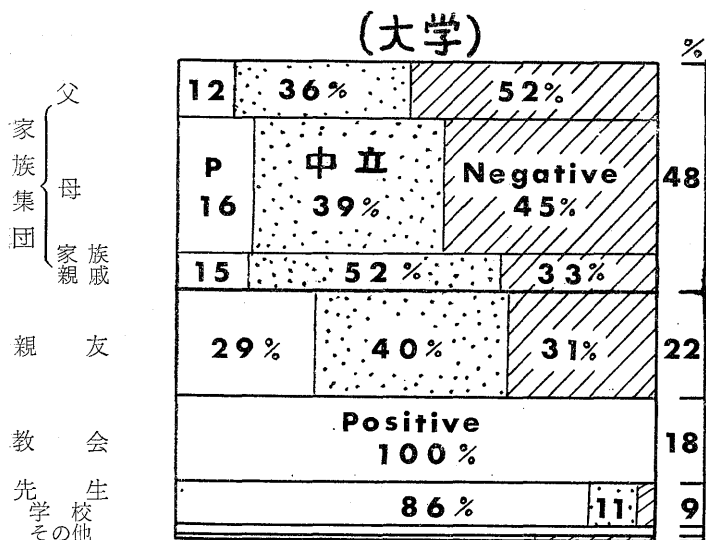
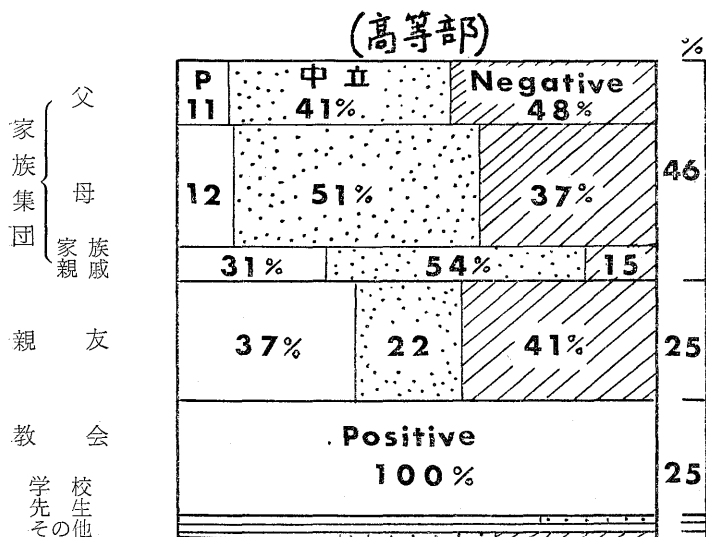
を含めた家族集団を、第1準拠集団とするものの比率が最も高い。学校、教師を含めた学校集団は、J 1 で30%を占めているが、学年が進むと共に次第にその比率が減少し、S 3 で最低の2.5%となっている。なお大学では1、2年で10%余、4年で20.6%となっている。学校集団を第1準拠集団とするものの比率が上学年になるにつれて減少するのと逆に、親友の比率が、J、S、大

学の各1学年から上学年になるにつれて著しく増大している。殊にSの2、3年は年令的にみても同年令集団への志向性が強くなる年令層であるため、同年令集団の規範の影響力は大きいと考えられる。教会を第1準拠集団とするものの比率は、J1の18%からJ3、S1の30%台へと次第に上昇し、S2、3で下降している。大学での比率も同様であり、大学1年の14%台から大2の25%へ上昇し、そして大4の14%台再び下降している。要するに全般的にいて、学生・生徒の第1準拠集団は、幾つかあるもののうち家族集団の比率が高く、親友の比率は学年と共に上昇する傾向があり、教会の比率は学年的変化が大きいといえる。

つぎに第1準拠集団の種類別に、キリスト教化についての規範の志向性別の比率を求めてみた。これをJ、S、大学別にみたのが第6図である。第6図は直角座標を使って、一方の軸に第1準拠集団の種類別による割合をとり、他方の軸に、キリスト教化への規範の志向性別による割合をとり、分割点から立てる軸への垂線が描き出す矩形の各面積を比較することによって各矩形の全体的割合をみようとするものである。中学全体でみれば、家族集団の占める割合が

第6図 第1準拠集団の種類とその規範の志向性



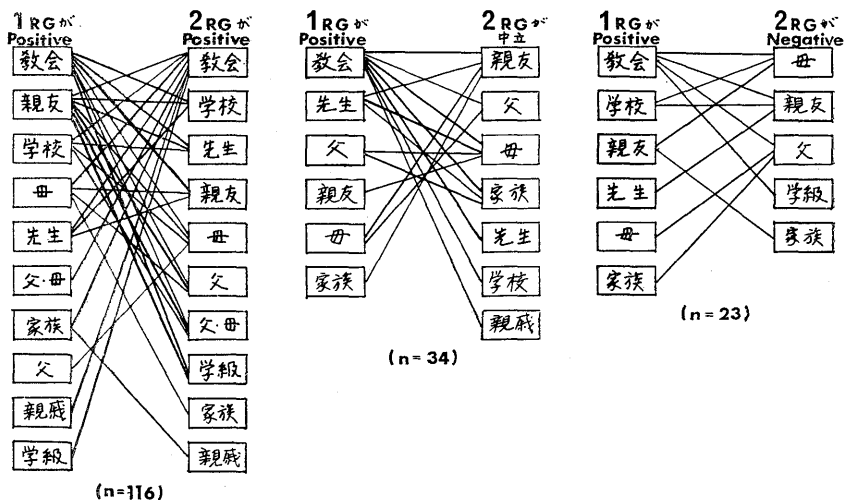


大きく、しかも家族集団の中ではキリスト教化に positive な割合が、小さく、negative な割合が高校に比べて比較的大きい。教会は言う迄もなく100%

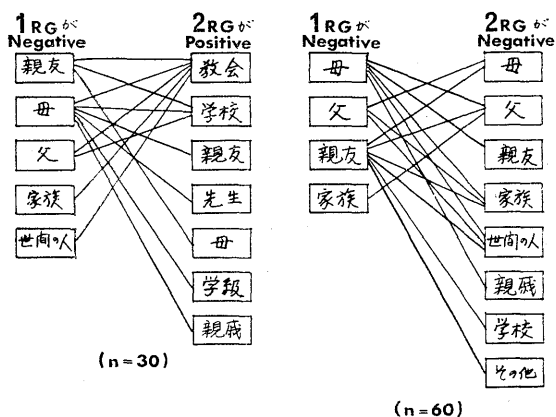
positive であり、学校・教師もそれに準じる。高校での特色は、家族集団のうち、negative な割合が中学に比べて減少している。これは子供を何年か通学させているうちに家庭の理解が少しずつ増してきている徴候とも受け取れる。なお、学校教師の占める割合は著しく減少し、代って親友の比率が増大していることが注目される。親友の志向性は、positive が37%で中学や大学に比べて positive で最も大きい比率を示している反面 negative が41%であるので、この高等部では、positive な志向性を持つもの同士、または negative な志向性を持つもの同士寄り合う傾向があるのではないかと推測される。大学では、家族集団の positive な割合が中・高に比べて大きい、negative な割合は中学部と同様な割合であり、これは新1年生にキリスト教主義校以外の高校からの進学者が多く含まれているためとも受けとれる。

規範別にみた準拠集団の種類の組合せ　すでに第7表で示したごとく、準拠集団の種類は多岐にわたっているが、ここでは第1準拠集団の種類とその規範からみた組合せとの実態を求めることにする。第7図では、中高部生徒が第1準拠集団の規範が positive な場合、その個々の種類の第1準拠集団に対して、第2準拠集団に如何なる種類の集団を選んでいるか、第1準拠集団と第2準拠集団の集団の種類の組合せを実線で結ぶことにより示した。第7図における集団の上下の順位は、第1準拠集団、第2準拠集団ともに、指名数の多いものを上位においた。第1準拠集団と第2準拠集団の規範別組合せは、第7図で示したPP、PM、PN、NP、NN以外にもNM、MP、MM、MN等があるが、前の5組合せ以外は該当標本数(n)が少ないので図式化を省略した。なお、ここで「家族」としているのは父母以外の家族のことである。第7図aの第1準拠集団が positive な場合をみると、規範の志向性が相互に支持的なPPにおいては、第1準拠集団で「教会」を選んでいるものはその半数以上が第2準拠集団として「学校」「教師」を選んでいる、フォーマルな集団規範への志向性によって positive な傾向が一層強められていると考えられる。第1準拠集団において「教会」以外を選んだ人達は、その大多数が、第2準拠集団に「教会」を選んでいる、これらのことから positive な準拠集団として「教会」が

第7図 第1、第2準拠集団の規範別にみた準拠集団の種類の組合せ
(中上部) a. 第1準拠集団の規範が Positive な場合



b. 第1準拠集団が Negative な場合



大きな地位を占めていることが推察される。第1準拠集団の規範が positive で第2準拠集団が negative な、いわゆる規範が相互に矛盾する形のところでは、negative な第2準拠集団は「母」「親友」「父」「家族」

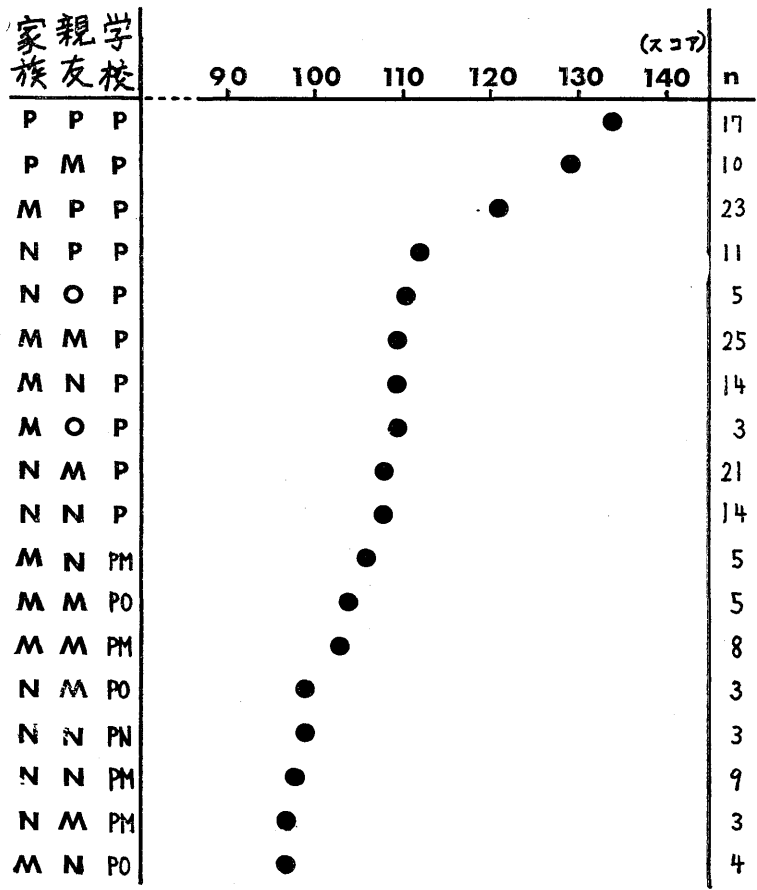
といったインフォーマルな第一次集団が選ばれている。7図のbでは第1準拠集団の規範が negative な場合の組合せをみたものである。ここでも、nega-

ative な規範をもった準拠集団の上位を占めているものは前掲の4種、すなわち「母」「父」「親友」「家族」である。これらの集団は生徒自身にとって最も身近な所属集団であるのでその規範の志向性が生徒に影響を及ぼすところが大きいと考えられる。なお negative な準拠集団として、不特定多数の漠然とした「世間の人」が選ばれているのがここでの種類上からみた一つの特徴である。

第8図は宗教的態度値の高低と、「家族」、「親友」、「学校」という3種類の準拠集団の規範の組合せをみたものである。ここでの分類は特に「家族」を父母、父母以外の家族、親戚を含めた家族集団とし、「学校」は、学校当局、教師を含めたものとして取り扱った。「家族」、「親友」、「学校」の三つを組合せとしたのは、これらの三準拠集団が、準拠集団として実数において大きな割合を占めており、フォーマル、およびインフォーマルな所属集団として大きな影響を持つと考えられるからである。第8図では規範別にした各組合せのグループの態度平均値を求め（このばあい、グループ内の人数2人以下は少数で比較に難があるため、これに該当する組合せは省いた）、平均値の高い順に並べてみた。第8図によると、学校集団の規範がキリスト教化に positive であると知覚し、同時に「家族」や「親友」の規範が positive ないしは中立なもの組合せ、すなわち上位1位から3位迄は、他の組合せに対して相対的に高い態度値を示しており、これらの組合せのパターンが、生徒の宗教的態度形成に大きな影響力を持つことを示唆している。その実数においては多くないが、逆に、下位の組合せをみると、「家族」や「親友」の規範は中立ないしは negative であり、しかも特徴的なことは、これら下位の人々が、「学校」集団を、PM (positive と中立)、PO (positive と不明)、PN (positive と negative) のごとく、学校集団を全面的に positive なものとして受け取っていないことである。このことは、いわゆる「学校」に分類上「教師」を含めたこと、及び一部の回答者が「学院全体」「学校当局・教師・生徒を含めた全体」として受け取ったためとも考えられるし、また他方において、マス・コミュニケーションの受け手の研究で知られるごとく、すべての被伝達者は、与え

られる多くの伝達事項の中から、自分の志向と同方向のものにより大きな反応を示す、ということの現われがあるかもしれない。しかしこの調査ではこの点までの分析はできなかった。

第8図 宗教的態度値と3種類の準拠集団の規範の組合せ（高校）



キリスト教々育において考慮すべき点

神戸女学院学生・生徒の宗教的態度と宗教的準拠集団についての研究に関してキリスト教々育の観点から考慮すべきいくつかの点を指摘したい。

第一は、第1準拠集団のキリスト教化についての志向性別にみた学年別態度値の変化として、中学においては3年ごろからその値が降下しはじめ、高校1年で急激に落ち、高3でふたたび下がっている。大学では大体平均化されている。

キリスト教主義学校に入学した中学生は、自己意識の強くなるにしたがって、そのキリスト教化への態度が反動的になり、高校1年でそれが最大になっている。ここにキリスト教々育上、その内容の質的变化を見過すわけには行かぬ点があろう。高校3年で再びその値が落ちるのは、大学入試への意識の高まるためであろう。

考慮すべき第二の点は、自己の規範の志向性と第1準拠集団の志向性との関係である。当然のことであるが、本人の志向性が **positive** な時に、第1準拠集団が **positive** であれば、その宗教的態度値も、宗教的行為インベントリー得点もかなり高いことがわかる。又本人の志向性が **negative** もしくは中立であっても、準拠集団が **positive** であれば態度値が非常に高いのに注目すべきであろう。本人の信仰の主体性も重要な要素であることは否めないにしても、その第1準拠集団が **positive** である場合には、無意識的にも宗教的態度値が高くなっており、その集団の重要性が考慮されるべきである。

第三の点は、第1準拠集団が、中学、高校、大学において、かなり変化しているということである。家族集団は、そのいずれにも、44～48%の位置を占めている。家族が本人の宗教的態度や意識に与えている影響は最大である。ただ中学と高校および大学との間での著しい変化は、友人の占める位置である。自己意識の成長にともなって、親友の占める位置が、中学の12%から、高校の25%へと倍にふえているし、大学でも22%となっている。親友からうける影響の大きさが再認識せしめられる。

教会は、勿論その志向性が **positive** であるが、中学、高校、大学それぞれにかかわらず、23、25、18%の位置をとっている。もう一つ見のがすことのできない点は、中学でかなりの位置を占めていた学校と先生（それぞれ8%）が、

一旦高校ではほとんど姿を消すが、大学になると先生の位置が9%となっている点である。中学時代の学校と先生に対するかなり単純な信頼が、高校時代にぐらついて、大学になると、むしろ学校全体というよりも、先生との出会いにかなり大きな位置があるということであろう。

以上の点からキリスト教主義総合学園でも教育上の問題点があきらかになる。中学と高校との間に、教育上質的变化を必要とする。特に自意識の急激な拡大からくる反動期に、ときふせるようなキリスト教々育ではなく、彼らの問いに、後に自ら考えうるような答えを与える必要のあることである。それもすぐに役立つ答えよりも、後の人格形成において大きな役割を演ずる答えが必要であろう。

親友の占める位置が高校、大学において強くなるということは、教育上考慮すべき大きな点である。学校内においても、学生・生徒がキリスト教々育の主演者である事を考えるべきであろう。学校側の圧力による伝道が逆の結果を導き出すであろうこともここから理解できるのである。

家庭の占める位置がおそろしく高いことも留意すべきことである。キリスト教主義学園に子女を送る家庭自体のキリスト教への態度について、学校も再考慮すべきであろう。

教会の示める位置は高く、又重要である。自発性を伴う教会での行為が、キリスト教々育上最も重要なものであることが再確認された。

要約と結論

本報告は、前述の如く「神戸女学院学生および生徒の宗教態度と宗教的行為に関する調査」（前掲）の続篇をなすものである。

本報告では、神戸女学院学生・生徒の宗教的態度と、その態度形成に影響を及ぼしていると考えられる準拠集団について考察を行い、その相互関連を求めようとするものである。学生・生徒の宗教的態度は、彼女らの第1準拠集団の彼女らによって知覚された規範の志向性の如何によって影響するところが大きいと考えられる。この点をみてみると、第1準拠集団の規範がキリスト教化に

positive なグループは、それが中立、乃至は negative なグループに比べて有意的によりキリスト教的態度をもっているといえる。そうして、これらの第1準拠集団の規範がキリスト教化に positive なグループは、第3図に示すごとく、キリスト教化への強い志向がみられるのであって、高得点へ向うほど標準偏差が小さくなる傾向を示している。なお第4図でみると、学生・生徒自身のキリスト教化についての規範の志向性は準拠集団の規範の志向性と同方向に向う傾向がみられる。このことは、第1、第2、第3準拠集団の規範の相互支持の状況との関連においても認められた。

次に、準拠集団の規範の影響を比較の準拠枠組から求めてみた。第1準拠集団の規範が positive なものは、宗教的態度の自己認識において他のものよりも比較の準拠の枠組が高いので、自己自身の志向性をキリスト教化に中立ないしは negative としていても、実際には、第1準拠集団の規範が中立ないしは negative で、しかも自己自身を positive などところに位置づけているものと比較して得点の高さにおいて変りがなかった。

準拠集団の種類と規範の志向性についてみれば第6図に示すように、中・高・大学ともに家族集団が大きな割合を示しており、その規範の志向性は中立と negative の割合が大きい。中・高・大へ進むにつれて positive な比率が上昇してきている。なお、親友集団は、中学部よりも高等部、大学において占める比率が大きい。

要するに学生・生徒の宗教的態度形成には、準拠集団の規範の影響が大きいことが推察されるのである。

なお最後に宗教々育との関連において、考察の課題又は展望について一言すれば、本論文では学生・生徒の学年別の準拠集団の変化について考察したのであるが、これを更に時代的な「時」の要素を加えて研究することが要請される。本調査についての前回報告の冒頭にも一言したように、明治時代のそれと、大正・昭和および特に戦前・戦後における準拠集団の推移は著しいものである。或る時代に突如として現われて来るものであるとか、現わるべくして現われないものの場合であるとか、それらの理由の検討も興味深い問題となるで

あろう。

宗教教育上も、この時代的な準拠集団の変遷の認識と今後の見通しとが重要であって、今や社会・文化関係が著しく交錯重畳関係を示しているの、思わざるものが準拠集団として伏在し、又は飛び出して来るわけである。その宗教教育に及ぼす影響は無視することができない。又、マス・コミの準拠集団形成に及ぼす影響は大きいので、この点も学生・生徒の環境とともに、宗教的態度および行為の帰趨に関わる有力なファクターとして考察の対象となるべきものである。

又、学生・生徒だけでなく日本人自身の準拠集団の選び方が総合的乃至 *syncretistic* な傾向をもつものと考えられるのであるが、この点の考察は又別個の大きなテーマになり得る。しかし逆に言えば、現代のこの様な準拠集団の交錯する社会・文化関係自体が、学生・生徒に対してキリスト教関係集団を彼らの準拠集団として選択せしめるための機会ともなるのである。

しかし、これを現在の時点における学生・生徒の最も身近な生活環境から見ると、本論文で考察したような種類のものを準拠集団として認め得たのであり、これは相当普遍的な或る程度まで時代を越えた人間性に立脚する準拠集団の側面であり、しかもこれは信仰態度および行為の形成の上で重要なファクターとなっているものであることを知り得たのである。

文 献

1. 安藤延男 “宗教的態度形成におよぼすリファレンスグループの影響” 「教育・社会心理学研究」第1巻第1号 (1960.6) , pp.84—95
2. 安藤延男 “宗教的情操の因子分析的研究” 「教育・社会心理学研究」第3巻第2号 (1962.12) , pp.54—63
3. 安藤延男 “宗教的情操尺度の標準化—主として基督教的立場から—” 「教育・社会心理学研究」第4巻第2号 (1963.12) , pp.61—73
4. 安藤延男 “宗教的行為インベントリーの標準化—とくに基督教との関連における—” 「教育・社会心理学研究」第5巻第1号 (1965.9) , pp.61—73

5. Merton, R.K. Social Theory and Social Structure, Free Press, 1957.
(森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳「社会理論と社会構造」1961)
6. 溝口靖夫・茂洋 “神戸女学院学生及び生徒の宗教態度と宗教的行為に関する調査” 「神戸女学院大学論集」第12巻、2, 3 合併号 (1965.12) , 39—72頁。
7. Newcomb, T.M. Social Psychology, Dryden Press, 1950.
(森東吾・万成博訳「社会心理学」1956)
8. Sherif, M. & C. W. Sherif An Outline of Social Psychology, Harper, 1956.
9. Sherif, M. & C. W. Sherif Reference Groups, Harper, 1964.

Mizoguchi, Yasuo
Nishiyama, Misako
Shigeru, Hiroshi

Survey of Students' Attitudes Toward Christianity and Their Reference Groups at Kobe College

Résumé

The formation of a person's religious attitude is influenced by a set of norms of his reference groups. Reference groups are those groups to which the individual relates himself as a part or to which he aspires to relate himself psychologically. The individual's standards and behaviour patterns are regulated in relation to the reference groups to which he relates himself.

This survey shows the various kinds of reference groups in students' attitudes toward Christianity at Kobe College. These reference groups are their parents and family group, kinship, intimate friends, the Church, teachers, college, and secular people.